

## 第24講 小説(5) — 表現の特徴

## ●要點整理●

文章表現に見られる特徴を問う設問。傍線部または文章全体に関して、修辞法やその効果、象徴的表現などについて問われる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

- ・本文の内容と表現の特徴についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
- ・この文章において「……」はどのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

## ◎解法のポイント

- ① 表現の特徴として問われるものには次のようなものがある。

○視点に関するもの…一人称の「私」の視点・登場人物を超越した語り手の視点など

○比喩に関するもの…直喩・隠喩・擬人法など

○描写に関するもの…写實的・幻想的・即物的・感覺的など

○内容と関連するもの…内面描写・自然描写など

○その他…長文または短文・会話文・方言など

- ② 表現の特徴は内容と密接な関係がある。小説は文体、さまざまな修辞法、象徴的表現などにより、その内容を豊かに表現している。右にあげた諸点をもとにどのような手法が用いられているのか判断する。

- ③ 選択肢を吟味する際は、指摘された特徴が正しいかどうか、本文中の具体的な記述に基づいて判断する。適否の判断のつかない特徴にはこだわらず、適否の明瞭な特徴に着眼するとよい。

- ④ 表現の特徴に関する問題として、本文で繰り返されるキーワードの役割(特に象徴的役割)を問う設問が出題されることもある。本文全体を、ポイントをおさえながら把握して、その語句が果たしている役割を把握する。

表現の特徴を問う問題は、レベルが比較的高い。特に最後の設問として配置される場合は全文の内容をおさえる必要がある。修辞法に習熟し、筆者が何らかの意味を持たせている表現に着目して小説を読む訓練を積もう。

## 演習問題 A

次の文章は、三浦哲郎の小説『まばたき』の全文である。これを読んで、後の設問に答えよ。

旧友は、なにかひどく驚いたようなまろい目を天井へ向けたまま、荒い呼吸を繰り返していた。けれども、病室の天井はただ薄汚れているだけで、寝ている病人を驚かすものなどあるはずがない。

## POINT

## 読解のポイント

表現の特徴についての補足的説明

## (1) 視点

- (a) 登場人物を超越した視点から物語が語られる場合、特定の人物(特に主人公)の立場・心情に即して描いているのか、人物を公平に描き分けているのか。

- (b) 一人称主語(「私」など)で語られる場合、自分の心理や相手の心理を分析的に描いているのか、出来事の推移を主に描き、心理は表面的に描くにとどめているのか。

- (2) この二つの観点からその特徴をつかむ。

## 描写

- (a) 「写實的」 現実を美化、理想化せずにありのままに描写したさま。

- (b) 「幻想的」 現実を離れた、夢、幻のような空想の世界のようであるさま。

- (c) 「即物的」 主観を交えず、事物をそのものに即して描写しようとするさま。

- (d) 「感覺的」 擬音語・擬態語・比喩などを用いて、五感に訴えるように描写するさま。

見ていると、旧友の目は、嵌め込まれたガラス玉のように全く動かなかった。じきに、その目がまるく見ひらかれて  
 いるだけで、実はなにも見てはいないのだとわかった。顔を寄せても、なんの反応もなかった。

「どうしたんだろう。」

「中りゃんしてなす、テレビの相撲を観ているうちに。」

彼を呼びに来た旧友の細君がいった。彼の故郷であるこのあたりでは、中風のたぐいで倒れることをおしなべて  
 「中る」といつている。そういえば、この男は高校のころ相撲部にいたな、と彼は思い出した。

「意識は戻ってないみたいですね。」

「いいえ。」と細君はかぶりを振った。「先生もそうおっしゃいますけれど、おらはなんぼか戻つてると思っております。」

それから細君は、ために亭主へ声をかけてみてくれなかつた。彼は旧友の名を呼んでみた。すると、どうい  
 う刺激のせいなのか、旧友は、まばたきを一つした。たつたいちどだけだったが、まるで音がするような強いまばたき  
 であった。

細君は、胸の前で勢いよく両手を組み合わせ、狂喜の面持ちで彼を見た。

「ほれ、いま、まばたきしゃんしたえ。これは、あんたさんのお声がわかつたという証拠でやんす。父ちゃんは、目で  
 返事したんでやんすよ。」

彼はもういちど旧友の名を呼んでみたい誘惑に駆られたが、細君を困惑させることになつては気の毒だと思つて、よ  
 しにした。細君は、彼の声にわずかながら反応を示したこの機を逃すまいとするように、亭主の耳に口を寄せて熱心に  
 語りかけていた。

ここは泌尿器科の病室で、入院が長引きそうなので空室の多いこの病棟へ移されたのだが、驚いたことに、偶然、隣  
 室に高校時代の思い出話によく出てくる級友のひとり\*が虫垂炎をこじらせて入院していて、看護婦に確かめてから挨拶  
 に伺つたついでに、こちらの様子を見にきて頂いた——そんなことを細君は話して聞かせてから、主人はあなたのお声  
 を耳にしてさぞかし意外に思っていることでしょう、といった。

「意外なのは、こちらもおなじです。」

と彼はいった。

まさか、こんなところで、寝台の上に肥満した四肢を投げ出して仰臥したまま泥人形のように微動だにしない旧友  
 と再会することになるとは思わなかつたのだ。

「あんたさんも運の悪いこつてしたなあ。」

細君は、眉をひそめて気の毒そうに彼を見た。郷里を出て、もう三十年越し東京暮らしをしている彼が、たまたま休  
 暇をとって帰省中に、しかも人里離れた歓泉宿で発病してあやうく手遅れになりかけた不運を、口の軽い看護婦からで  
 も聞き出したのだから。

「ひどい目に遭いました。いつ、なにが起るか、わからんもんですな。」

◇かぶりを振る＝頭を横に振って否定す

る。「かぶり」は頭。

◇機を逃す＝機会を逃す。

◇仰臥＝仰向けに寝ること。

◇泥人形＝泥をこねてつくった人形。文  
 中では、意識の戻らないまま物体のよ  
 うに横たわっている旧友の様子をたと  
 えている。

◇微動だにしない＝ごくわずかな動きも  
 しないこと。「だに」は古語の副助詞。

彼がそういったとき、不意に細君が小娘のような声を挙げて彼の寝衣の袖口を掴んだ。

「いま、ごらんになりやんした？　また、父ちゃん。まばたきしやんした。きつと、おら共の話を聞いてたんでやんしょう。それで、あんたさんの言葉に共感の合図を送ったんでやんす。」

そのまばたきを見損なつた彼は、返事に窮して、枕の上の随分大きく見える旧友の赤ら顔を、黙って眺めた。相変わらず、ガラス玉のような目が飛び出しそうに天井を仰いだまま動かない。細君が我にかえつて、掴んでいた彼の寝衣の袖口をどきまきと放したのをしおに、お大事に、と彼は頭を下げて旧友の病室を出た。

隣には、見舞客の気配もなく、時折、細君のほやくような独り言と、医師や看護婦になにか訴えるような声が、壁越しに低くきこえるぐらいで、一日の大部分の時間は空室のようにひっそりとしていた。夜ふけには、単独の躰がきこえた。もはや旧友には昼夜の別がないのだから、躰は夜眠る習慣を守りつづけている細君のものだと思われた。この病院は完全看護なのだが、隣室では細君が泊り込みで病人に付き添っているらしい。

東京で暮らすようになってから、郷里とはすっかり疎遠になって、もはや呼吸とまばたきしなくなっている旧友のその後についても全く知るところがなかったのだが、耳ざとい看護婦によれば、旧友は長年教職にあつて、いまは郷里と浜つづきの小都市の教育委員会で主事を務めている由であつた。

隣室の旧友を見舞つてから数日して、彼の主治医が退院の相談に病室まできてくれた。彼は、必要な話が済んでから、医師に旧友の容態について尋ねてみた。医師は、自分の担当ではないからと口籠りながら、手術さえ可能なら希望が持てるのだが、といった。

「患部がきわめて厄介なところにあるらしくてね。脳外科の連中も手を出したがらないのです。」

「すると、彼はずっとあのままですか。」

「心臓が堪えられるならね。お気の毒なことです。」

「時々、まばたきをしますね。」

医師は目を伏せてうなずいた。

「奥さんがそれに希望を託してたな、意識のある証拠だといって。」

医師はしばらく黙っていたが、やがて、

「でも、それでいいのじゃないでしょうか。そう信じられて、希望が持てるんだつたら。私たちはその希望をわざわざ打ち毀すようなことはしないのです。」

と顔を上げていった。

退院の朝、彼は隣室へ別れをいいにいった。ところが、細君の姿は見えず、旧友だけが初めて見舞つたときとはとんとおなじ様子で病床にいた。彼は、戸口でちよつと躊躇つたが、無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした。彼は、旧友の枕許までいくと、

「じゃ、お先にな。ねばれるだけ、ねばれよ。相撲の選手だったころみたいにな。」

◇鉦泉Ⅱ鉦物質を多く含む温泉。

◇口の軽いⅡ「口が軽い」ともいう。物を言うのが軽率だ。秘密などを軽々しく他人に話す。対義語は「口が堅い」。

◇返事に窮するⅡどう返答してよいのかわからず、困る。

◇しおⅡ物事をするのにちょうどよい時。「潮時」ともいう。

◇ほやくⅡぶつぶつと不平を言う。

◇耳ざといⅡ早耳である。

◇主事Ⅱ役所や学校などにおいて、中心となつてその事務を取り扱う役職の人。主任。

◇口籠るⅡ①言葉が口の中にこもりはつきりしない。②言葉がつかえてはつきりと言えない。

◇素っ気ないⅡおもむき・おもしろみがない。一般に人の態度を表現し、「冷淡だ。おもいやりがない」の意で用い

と盆のような顔を見下ろしていた。

すこし待ってみても、旧友はまばたきをしなかったが、気のせいかな、その目がすこし潤んだように見えた。

細君は、売店へ買物にでもいったのかと思っていたら、そうではなかった。本館の玄関近くの、幅広い木の階段の太い手すりに手ぶらでもたれて、会計の窓口に群れる人々をぼんやり眺めていたのであった。彼は、一階の外來診察室にいる主治医に挨拶してから、玄関へ出てきて、それを見つけた。彼は、階段の脇から、手すりの細君を仰ぐようにして退院の挨拶をした。

細君は、エプロンを外してまるめただけで、急いで階段を降りてくるでもなかった。

「そんなところで、誰か探してらっしゃるんですか。」

「なんも。ただ退屈だったすけに。」

③ 細君は、ちよつと首をすくめて、そういった。

彼は、土地の患者たちのように退院後の念押し通院ができないから、せめて三週間にいちどずつ帰郷して病院を訪れ、手術や治療のあとを点検して貰うことになっていた。その負担の大きい通院は、結局三度でおしまいになったが、その三度とも、彼は病院で旧友の細君を見かけた。

彼女は、依然として退屈を持て余しているらしく、いつも外來患者の雑踏を見下ろす階段の手すりにもたれていたが、見かけるたびに、前より全身にやつれが目立つように思われた。髪や顔の手入れの仕方、衣服の色や柄の選び方、その着方も、どこか投げやりで、品位に欠けてくるように見えた。

主治医に、もういいでしょう、といわれた日、黙って別れるわけにもいかないうような気がして、

「御主人、いかがです?」

と下から声をかけると、

「だんだんいいみたい、おらがそばにいてもいなくても。」

と細君はいつて、居酒屋の女のように自分の下手な冗談を大口で笑った。

「いまでも、時々まばたきをしますか?」

「する、する。ウインクみたいなやつを連発してる。」

④ 彼は、そういつてわざとらしく笑い崩れる細君から目をそらすと、急ぎ足で玄関へ歩いた。

(注) 中風：脳出血などによって起こる半身不随、手足の麻痺などの症状をいう。「ちゆうふう」ともいう。

虫垂炎：盲腸のさきにある虫垂の炎症。盲腸炎ともいう。

問一 — 線①「細君を困惑させることになつては気の毒だと思つて、よしにした」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 夫のまばたきに意識の回復の兆しをみようとすると細君を見ていると、動揺しているのはよくわかるのだが、そ

る。

◇首をすくめる⇨失敗や照れ隠しなどのために、首をひっこめる。

◇持て余す⇨取り扱いや処置に困る。

◇投げやり⇨物事をいい加減な態度で行うこと。

## POINT

△理由説明を求める設問。「細君を困惑させること」とは具体的にどのようなこ

とかを考える。

れを露骨に指摘しては、献身的に看病している細君に失礼だと思ったから。

イ 夫がまばたきをしたことに狂喜している細君を目の前にして、いまはともかく気が動転している彼女の気持ちを落着かせることが先決で、むやみに刺激してはいけないと思ったから。

ウ 自分自身に言い聞かせるように、夫の復調への希望を主張する細君の前で、もう一度旧友の名を呼んで、その生死を確かめるのは、軽率な行為になってしまったと思ったから。

エ 夫は偶然まばたきをしたのではなく、自分の意思によって反応したとみなして、そこに一縷の望みを託そうとする細君の気持ちに水をさしてはいけないと思ったから。

オ 自分を偽ってまで夫のまばたきに期待を託そうとする細君を見てみると、何の反応もないとわかっているのに、旧友の名を呼んで細君を傷つけるわけにはいかないと考えたから。

問二 線②「無人にも等しい病室の素っ気なさが彼を大胆にした」とあるが、この場面における「彼」の心情の動きを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア あれこれ話しかけてくる細君に注意を払わなくてもいいので気持ちが楽になり、寝台の上で微動だにしない旧友の姿を勇気をもって見極められるようになった。

イ 生きている人間の気配さえ消えた病室の中で二人きりになってみると、知らず知らずのうちにお互いが若かった頃のことを思い出され、少年の頃の遠慮のない率直な気持ちになった。

ウ 静まりかえった病室の中で二人きりになったとき、はじめて、直に旧友と向き合い、誰にもはばかりに語りかけることができるようになった。

エ 生きているのかどうかも分からない旧友が病室の中にぽつんと取り残されている姿を目の当たりにして、人間のはかない運命をたじろがずに受け入れられるようになった。

オ 意識を失って昏睡している旧友が横たわる病室の静けさに触れ、思い切って最期の別れを言っておかなければならないのではないかと切迫した気持ちになった。

### 問三

線③「細君は、ちよっと首をすくめて、そういった」とあるが、ここでの「ちよっと首をすくめ」るようなしぐさには、細君のどのような気持ちが表れているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 夫がなんとか回復してくれることを願いながらも、その一方では、夫に回復の見込みがないだろうという現実も認めている。しかし、看病生活が続くうちに張りつめた気持ちを失い、つい時間をもてあまして退屈している自分を照れくさそうに取りつくりう気持ち。

イ 夫の旧友がわざわざ見舞いに来てくれたというのに、自分は、疲労が重なったこともあって退屈そうな素振りではんやりしてしまった。そのことを申し訳なく思いながらも、どこか投げやりになってしまいたくなる気持ちをくんで欲しいと期待して媚びるような気持ち。

ウ 微動だにしないまま寝台に横たわる夫を間近に見ながら長い時間を過ごしていると、だんだん病状に対して悲

◇「一縷」わずか。かすか。

◇水をさす「うまくいっていることの邪魔をして不調にする」。

△心情説明を求める設問。彼は細君がないことで「大胆」になり、旧友に親しく話しかけている。

◇はばかり①遠慮する。②はばかりをきかせる。

△心情説明を求める設問。「首をすくめる」しぐさの意味するところをおさえる。「退屈だった」という細君の言葉から、長引く看病生活で細君の意識に変化が生じた点を読み取る。

観的になるし、体力的にも辛い。だから、一人きりのときは出来るだけリラックスして元氣を取り戻そうとして  
いる自分を理解して欲しいという親しげな気持ち。

工 時間をもてあましながらも、旧友に夫のことを相談しようと思って、彼が玄関に出てくるのを待っていた。し  
かし、全身にやつれが目立っているし、髪や顔も手入れしないまま毎日過ごしているため、目の前まで降りて  
行つて挨拶するのは、ばつが悪いという気持ち。

オ 看病生活が続いていくうちに、否定しきれない現実を思い知らされるようになり、退屈な時間を過ごしていた  
自分の姿を見られたことは恥ずかしい。△が、よそよそしい態度で見送るわけにもいかないし、かといつてわざ  
わざ言い訳に行くのも面倒だという気持ち。

問四 — 線④ 「彼は、そういつて……急ぎ足で玄関へ歩いた」とあるが、「彼」はどうして「目をそら」したのか。  
その理由の説明として最も適當なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の夫が死の危機に瀕しているというのに、下手な冗談を言いながら大口で笑っている細君が不謹慎に思え、  
細君に抗議の意思を伝えたかったから。

イ なかば諦めながらも精一杯の愛想をふりまく細君を見てみると、彼女の役に立つどころか、励ましの言葉さえ  
十分にかけてやれない自分が情けなくなってきたから。

ウ 医者からも見放され絶望の淵に立たされているのに、まばたきをウインクなどと言って、逆にこちらを笑わせ  
ようとする細君の心遣いに胸を打たれたから。

エ 入院が長びきそうな病人を抱えて生活していく苦勞を思いやると同情を禁じ得ないが、自分もいつ同じ立場に  
なるかわからないのだという不安にかられたから。

オ 全身にやつれが目立ち、どこか品位を失いつつある細君がつくり笑する姿に、つらい人生の一断面を見るよ  
うな思いがし、切なさにいたたまれなくなつたから。

問五 本文の内容と表現の特徴の説明として適當でないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「中りゃんしてなす」、「ただ退屈だつたすけに」といった方言を使うことによって、旧友の妻のあたたかみのあ  
る人柄を伝ええると同時に、その土地に根づいた人間の姿を生活感豊かに表現している。

イ まばたきをウインクといつて冗談めかすようなユーモラスな表現を挿入することによって、厳しい現実に追いつめられながらも、それを笑つてやり過ごそうとする妻のせつなさを、浮き彫りにしている。

ウ なんの反応もなく寝台に横たわる旧友を、「嵌め込まれたガラス玉のように」、「泥人形のように」といった比  
喩を用いて描くことで、その痛ましい姿を直視しようとする「彼」の心理を表現している。

エ 病院での単調な看病生活を続けながら、一貫して夫の回復を信じている旧友の妻の様子が、「彼」の治療  
期間中に鮮明な印象を残した体験として、写實的に描かれている。

オ 意識のない患者が反射的にまばたきをする可能性があることを知りながら、それをあえて妻に直接説明しない  
医者を登場させることによって、作品の世界に奥行きを与えている。

◇ 「ばつが悪い」決まりが悪い。具合が悪く  
恥ずかしい。「ばつ」は①話のつじ  
つま、②その場の都合、具合。

△ 理由説明を求める設問。依然として退  
屈そうな細君を見て、「彼」はどのよ  
うな印象を受けたか。そして「わざと  
らしく笑い崩れる」様子を見てどのよ  
うに思ったのかということについて、  
この場面をもとに読み取る。

◇ 禁じ得ない＝抑えることができない。

△ 内容と表現の特徴を問う設問。本文の  
描写のしかた、文体の特徴、表現技法  
などについておさえたうえで、各選択  
肢の内容を吟味する。

◇ 写實的＝現実を美化、理想化せずにあ  
りのままに描写したさま。